

Bird Research Annual Report 2024

バードリサーチ活動報告



NPO法人 バードリサーチ
Japan Bird Research Association



アオゲラ (Photo: ZHIBO)

ごあいさつ

2024年はバードリサーチの中で働く私たちにとって大きな変化の年となりました。設立から先頭に立って牽引してきた前代表が退き、新しい体制での活動が4月からスタートしました。前代表が担っていた役割を皆で分担し、どうにかこの1年を乗り切ることができました。

前代表が中心になって実施した20年に一度の「全国鳥類繁殖分布調査」は、鳥類に関わる多くの団体や環境省の協力のもと、数年前に3回目にあたる調査を終えたばかりです。しかし、あと10年もしたら4回目の調査の時期がやってきます。私たちは、先達が築いてきた市民調査のネットワークをその時までつないでいかなければなりません。

バードリサーチの強みは、鳥の生態や生息状況に興味を持ち、調査や様々な活動に協力して下さる仲間が全国にたくさんいること、その皆さんによって蓄積されていく質の高い科学的なデータだと思えます。

これまでバードリサーチが蓄えてきたこれらの財産を活かしつつ、生物多様性国家戦略2023-2030が策定されて以降急速に普及してきたネイチャーポジティブや30by30の概念や目標を踏まえて、バードリサーチでは、次の「全国鳥類繁殖分布調査」に向けた中期計画の作成を進めてきました。2025年には少しずつ新しいバードリサーチをお見せできたらと思っています。引き続き、バードリサーチの活動へのご参加、ご協力をお願いします。

今年もたくさんの仲間と全国で調査やデータ収集を行うことができました。調査に参加していただいた皆さま、データ提供や寄付等でご協力をいただいた皆さまにお礼を申し上げると共に、今年の活動成果の一部をご報告いたします。

Staff

職員 左から 植村慎吾、姜雅瑠(ジャン ヤージュン)、野村佳那子、守屋年史、神山和夫、高木憲太郎



嘱託研究員 (五十音順)



植田陸之



黒沢令子



熊田那央



シンバ・チャン



奴賀俊光



平野敏明



福田佳弘



藤田 薫



三上かつら



山崎優佑



ライチョウ (Photo: 小沢夏都)

NEWS & TOPICS

日本の鳥の「渡り性」の変化 — 全国鳥類繁殖分布調査、全国鳥類越冬分布調査より

【BRNews 2024年3月:1】

2016年から2021年に実施した全国鳥類繁殖分布調査と全国鳥類越冬分布調査の結果を約40年前に実施された調査結果と比較することで、日本の鳥の渡り性の変化が見えてきました。繁殖期と越冬期のそれぞれで記録されたメッシュの割合を夏鳥指数、冬鳥指数、両季節で記録されたメッシュの割合を留鳥指数として計算しました

アオサギ、オオタカ、ハヤブサ、ハクセキレイなど12種は、1980年代には主に冬鳥でしたが、2010年には留鳥性が高くなっていました。大型の魚食性の鳥、鳥類食の猛禽類は、かつて農薬の影響を受けて減少したと考えられている鳥です。その後個体数の回復とともに国内で繁殖するものが増えて、冬鳥から留鳥への変化が起きたのかもしれない。

ヒクイナやサンショウクイは、夏鳥から留鳥への変化が起きていました。これらの鳥は、温暖化の影響で夏鳥が越冬期にも残るようになった可能性があります。夏鳥から留鳥への変化は多くありませんでしたが、将来的にそうした変化も多くなるのではないかと考えられます。今後もデータ収集を続けていきたいと思えます。



ハクセキレイ
(Photo: 田村のどか)

種名	1970-80年代				2010年代				変化
	冬鳥指数	夏鳥指数	留鳥指数	n	冬鳥指数	夏鳥指数	留鳥指数	n	
カワウ	92.45	3.77	3.77	53	18.82	14.29	66.90	287	冬→留
アオサギ	72.28	10.4	17.33	202	7.10	27.56	65.34	352	冬→留
ダイサギ	75.66	1.97	22.37	152	20.83	10.61	68.56	264	冬→留
ミサゴ	56.78	22.03	21.19	118	22.64	31.32	46.04	265	冬→留
オオタカ	65.31	22.45	12.24	147	28.02	21.74	50.24	207	冬→留
ハヤブサ	72.73	19.58	7.69	143	29.17	26.67	44.17	240	冬→留
ハクセキレイ	56.02	20.78	23.19	332	17.80	22.88	59.32	354	冬→留
ヒクイナ	7.94	86.51	5.56	126	17.82	31.68	50.50	101	夏→留
ヤマセミ	28.86	23.38	47.76	201	28.67	44.67	26.67	150	留→夏

▲ 渡り性の変化

樹木が枯れると、キツツキ類と樹洞に営巣する鳥が増える — モニ1000 コアサイトの森

【BRNews 2024年11月:2】

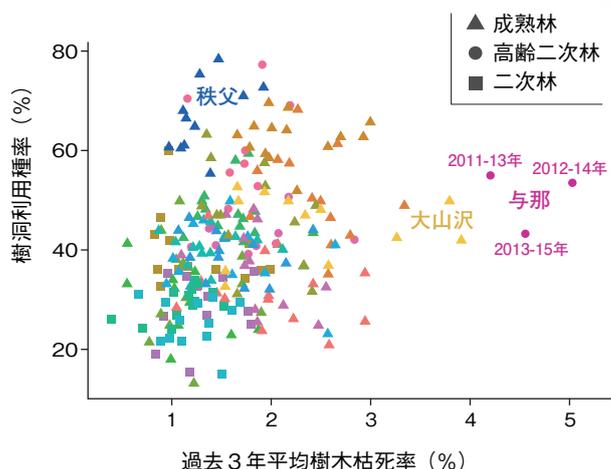
環境省の委託で実施しているモニタリングサイト1000陸生鳥類調査のコアサイトでは、毎年継続して樹木や徘徊性昆虫の調査が実施されています。同じ場所で複数の分類群について詳細な調査がされている強みを生かすことができないかと考え、毎木調査から得られる樹木枯死率(前年調査で生きていた木のうち、枯れた木の割合)の集計値(自然環境研究センター小川裕也氏による)を用い、鳥のデータとの比較をしました。

鳥の個体数データを営巣形態ごとに集計し、樹木枯死率との関係を分析したところ、樹木枯死率が高い森ほど、鳥全個体数に占めるキツツキ類の割合が高く、樹洞に営巣する鳥の割合も高いことがわかりました。枯死木は、キツツキ類に食物と営巣場所を提供し、キツツキ類が掘った穴はカラ類な

どの樹洞営巣性の鳥に巣場所を提供するので、こうした傾向がみられます。国内の天然林では樹木の樹齢が高くなり、枯死するものが増えてきていると思われるので、今後も継続してモニタリングから森の変化を捉えていきたいと思えます。



アカゲラ
(Photo: 藤井 薫)



◀ 過去3年間の平均樹木枯死率と、鳥類の全記録個体数に占める樹洞利用種の割合の関係。プロットの色はサイトの違いを表す。樹齢が高くなっている大山沢、台風の直撃が2011年と2012年であった与那では樹木枯死率が高い期間があった。



キンクロハジロ (Photo: 野間修一)

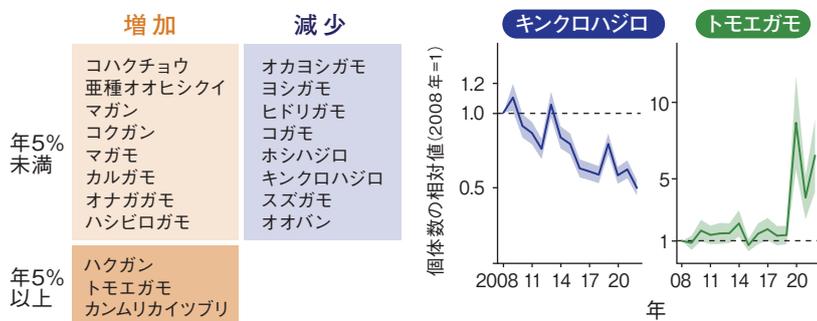
モニタリングサイト1000 ガンカモ類調査の長期分析をまとめました

2000年代以降のガンカモ類の個体数変化を分析したところ、分類群による傾向の違いが見られました。増加していたのはハクチョウ類やガン類のような大型の種と、マガモ、カルガモ、オナガガモといったマガモ属、そしてトモエガモ、カンムリカイツブリでした。一方、ヒドリガモ、オカヨシガモ、ヨシガモといったヒドリガモ属、そしてホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモといったハジロ属は減少していました。ガン、ハクチョウ類の増加は世界的な傾向で、繁殖地である高緯度地帯の温暖化や、越冬地で栄養価の高い農作物の収穫の残りを食物にするようになったことが原因と考えられています。しかしカモ類の個体数の変化についての研究は進んでいないので、今後も蓄積したデータの解析を進めていきたいと思えます。

この解析は、環境省のモニタリングサイト1000事業のとりまとめの一環として、「モニタリングサイト」と「渡り鳥飛来状況調査」のデータを使って行いました。モニタリングサイト1000では、バードリサーチが事務局をしているシギ・チドリ類や森林草原性の鳥類の分野でも長期変化の分析を行い5年に一度のとりまとめ報告書を作成しました。



トモエガモ (Photo: 川上由希)



▲増加または減少しているガンカモ類

農耕地を利用するシギ・チドリ類の傾向

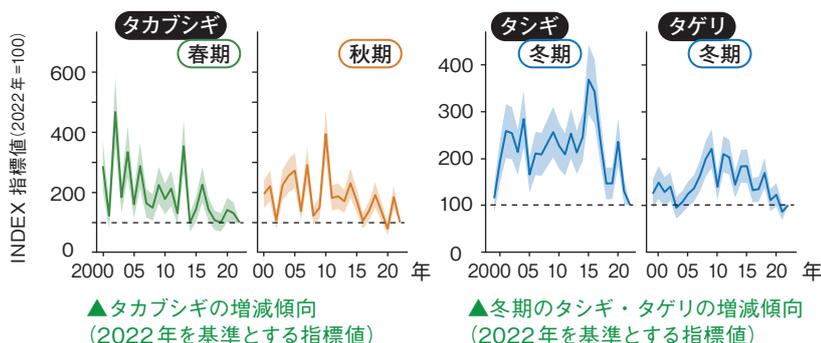


タゲリ (Photo: 数野千恵)

シギ・チドリ類は、干潟や砂浜などの沿岸部の湿地を利用しますが、内陸の淡水湿地もよく利用します。しかし内陸の自然湿地は少なく、また開放された水面を好むシギ・チドリ類にとって利用しやすい環境は多くはありません。そのため、シギ・チドリ類は、水田やハス田などの人工的な淡水湿地を利用しています。

水田地帯を利用する代表的なシギ・チドリ類として、ケリ、タゲリ、オジロトウネン、

クサシギ、タカブシギ、オオハシシギ、エリマキシギ、ツルシギ、タシギ、タマシギなどが挙げられます。これらの種の1999年から2022年までの個体数を分析しました。タカブシギは日本を中継地として通過する渡り鳥で、春期と秋期に観察されますが、春期と秋期で半減していました。加えて、同様に日本を通過するオジロトウネン、エリマキシギ、ツルシギも渡りの時期に減少傾向が見られました。また、水田地帯で繁殖するケリやタマシギも春期と秋期に減少傾向が見られており、日本を越冬地として利用しているタシギやタゲリは、期間中に大きく増減していますが、近年は減少傾向が見られています。自然の代替湿地として水田地帯は、淡水湿地を好むシギ・チドリ類にとって重要な場所ですが、利用しにくくなっているのかもしれませんが、人の営みとうまく共生しながら生息地を保全していく必要があります。



カワウのねぐらにおける生活環境被害 対策パンフレット 作りました

近年、住宅地の近くの池にカワウのねぐらやコロニーが形成されて、糞の匂いや汚れによる生活環境被害が発生するようになっていきました。バードリサーチでは、関西広域連合からの委託を受けて、こうした被害の訴えがあった時に府県や市町村が住民への説明などに使えるパンフレットの作成を行いました。カワウの生態を踏まえてなぜ被害が発生するのか、対策の考え方や方法などをわかりやすくまとめました。パンフレットは加工できるデータファイルで作成し、自治体が現場の状況に合わせて加工して使えるよう

にしています。ふんだんに採用した挿絵は、今後、カワウ対策についての情報発信をしていく際に使えるよう、会員のカトウアヤコさんに描いてもらっていたものをバードリサーチから提供しました。



カワウ
(Photo: 宮本 桂)

食性データベースクラファンとツグミ類食性

【BRNews 2024年5月: 1, 8月: 1】

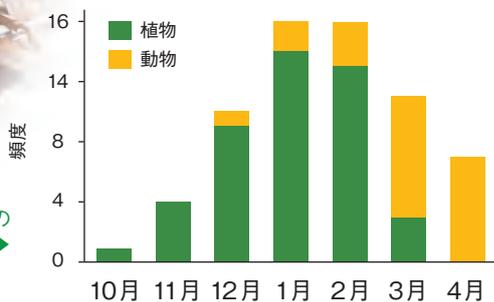
これまでに約5000件の記録が蓄積された食性データベースは、記録件数の多い種では季節変化もみえるようになってきました。例えばツグミは秋から春にかけて、採餌内容や採餌場所に明確な季節変化があることがわかってきました。

今年はより多くの人により気軽に情報を登録していただき、蓄積された記録が一目でわかるようにするためのウェブ基盤を整備することを目的にクラウドファンディングを行いました。たくさんのご支援をいただき、目標金額を達成することができました。現在、ウェブサイトと情報登録ページリニューアルに着手しています。

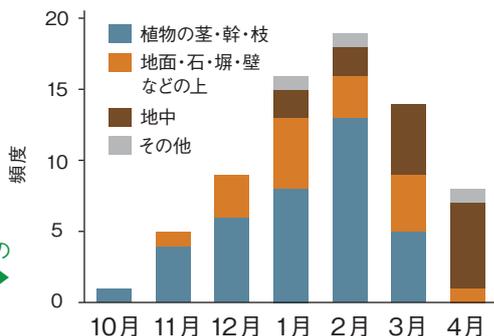
また、食性データベースに寄せられた記録から初めての論文を出すことができ、他の論文で食性データベースが引用されたほか、共同研究も始まっています。今後もみなさんと情報を蓄積して、様々な研究の基礎となるデータベースを提供していきたいと思えます。

シロハラ
(Photo: 川上由希)

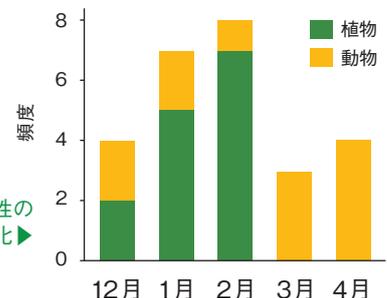
ツグミの食性の
季節変化▶



ツグミの採餌場所の
季節変化▶



シロハラの食性の
季節変化▶



フィリピンのコーヒー農園で夏鳥を調査

【BRNews 2024年6月: 1】

春から夏に日本でヒナを育てる野鳥には、東南アジアに渡って冬を過ごす種が多くいます。しかし東南アジアでは森林破壊が進み、夏鳥の越冬地が危機にさらされています。森林破壊の主な原因のひとつは焼き畑による農地の拡大ですが、環境保全型農業によるコーヒー栽培が問題解決の一助になるかもしれません。伝統的なコーヒー栽培はアグロフォレストリーと呼ばれる里山の雑木林ような環境で行われるため、一定の樹林を維持しながら生産ができます。それでは、このようなコーヒー栽培をしている環境には、どのくらいの野鳥が生息できるのでしょうか。フィリピンのルソン

島で調査したところ、コーヒーを栽培しているアグロフォレストリー農園は、その周囲の二次林と同程度の野鳥が生息していて、環境保全効果が高いことが分かりました。さらにサンショウクイやエゾビタキなど越冬中の夏鳥が8種も見つかったので、私たち消費者が環境に配慮して生産したコーヒーを選ぶことが、夏鳥の越冬地を守ることもつながります。バードリサーチでは現地で森林保護や農業支援をしているNGO "Cordillera Green Network" と協力して、環境保全型のコーヒー生産を支援する取り組みをはじめています。

サンショウクイ
(Photo: 渡辺修自)

エゾビタキ
(Photo: 高石良子)

◀ 自然の樹木に混じってコーヒーやバナナが植えられているアグロフォレストリー農園。



古い野帳のデータベース化

日本では昔からいろいろな鳥の記録を全国各地の精力的なバーダーや団体がつぶさに記載してきましたが、そうした記録の多くが継承されることなく失われつつあります。そこで、主に野帳などに蓄積されてきた貴重な記録をデータベース化していくプロジェクトを開始しました。国立環境研究所の北沢宗大さんらが中心となってバードリサーチと共同で実施しています。これまでに、日本のナチュラルリストや野鳥研究者として先駆的な仕事をされた高野伸二さんや、塚本洋三さん、そして由井正敏さんの野帳をお借りして、野帳の複製およびデータの抽出を行っています。

まずは塚本洋三さんの記録の抽出と解析を行い、主に1950-60年代の東京湾の記録を

みてみました。越冬期には100羽を超えるマガンの記録があったり、400羽のツルシギの記録、800羽のキアシシギの記録があったりと、現在ではとても考えられないような観察記録があります。このような過去の様子を伝える貴重なデータを調査や研究に活用できるように整備していきたいと思えます。

▼塚本さんよりお預かりしている野帳の一部。これまでに、主に1950年代からの記録を12356件抽出しました。



バードリサーチ調査研究支援プロジェクト —投票結果と上位2件の調査研究プラン

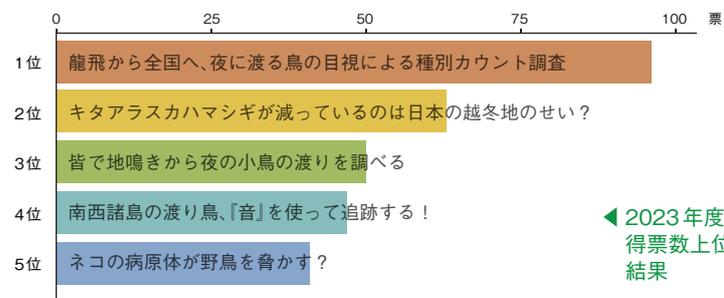
【BRNews 2023年12月:2, 2024年4月:4】

みなさまから寄付を募って、それをもとに鳥類の調査や研究を行う会員の方に支援しました。2023年度の支援の総額は約198万円。これらを得票数で割り振り、10件の支援先に贈呈しました。得票数の最も多かった調査研究プランは原星一さんによる調査研究プラン「龍飛から全国へ、夜に渡る鳥の目視による種別カウント調査—夜渡り調査の継続と、全国の新しい観察地開拓に向けて—」でした。2位は細谷淳さん、飯塚拓也さん、飯塚彩子さん、橋本宣弘さん、田谷昌仁さん、竹田山原楽さん、井上遠さんによる「キタアラスカハマシギが減っているのは日本の越冬地のせい？ハマシギの日本での越冬期の生存率を調べたい！」でした。得票数1位だった原さんの調査研究プランは、3年継続して支援対象となっており、昨年も紹介したので、今年は2位の細谷さんたちによる調査研究プランをご紹介します。

日本で越冬するハマシギの個体数は減少しています。また、北米大陸北極圏で繁殖する同種の3亜種の中で、日本にきている可能性のある亜種キタアラスカハマシギだけが生存率が低く、中継地や越冬地に原因があるのではないかと指摘されているそうです。そこで、細谷さんたちはハマシギを捕獲して標識し、越冬期の生存率と秋の帰還率を調べ、減少の原因が彼らの生活史のどこにあるのか探る調査を進めています。どんな成果が上がってくるのか楽しみに待ちたいと思います。



ハマシギ
(Photo: 柴田絵里)



クラウドファンディング実施報告

今年は、「シロチドリと生息地を守る活動」および「ツバメの子育てを守る活動」のクラウドファンディングを実施しました。多くの方からご寄付をお預かりし下記の活動を実施することができました。ご協力いただいた皆様にあらためて御礼申し上げます。

シロチドリと生息地を守る活動

シロチドリや砂浜の状況の普及啓発のため、解説・観察会を九十九里浜で実施しました。イベントは、バタゴニアや地元企業 Bocchi と共に実施し、約60名の方に参加いただきました。

また、シロチドリの繁殖状況を把握するため、継続的に九十九里浜でシロチドリの営巣状況を調査しています。調査で使用するセンサーカメラが故障してしまった



*2025年度は食性研究へのクラウドファンディングも実施いたしました。

ため、皆さまからの寄付で2台購入しました。今年、そのカメラで観察を行った巣で、抱卵の放棄を観察しました。捕食以外にも、荒天や人の攪乱によるストレスも繁殖失敗の要因となると考えています。

ツバメの子育てを守る活動

道の駅や鉄道駅の駅などへ、ツバメのイラスト入りファン受けをおよそ1500枚配布しました。また、ツバメ保護団体の「ツバノキ」と共同で、東京都八王子市でファン受けとカラス避けを設置しました。この地域で活動を始めた2021年は5ペアしか営巣していませんでしたが、活動により今年は20ペア以上が営巣しました。

その他、はじめて軒下でツバメを見た日の調査や、ツバメがどのような昆虫を食べているかを調べる活動も実施しました。



Photo: 塚原美香

みんなで進める 調査・研究

バードリサーチでは、野鳥の観察、調査、研究のための様々な取り組みを行っています。

調査や研究の成果を発表し交流する場として2020年から4回目の開催となった『バードリサーチ鳥類学大会』には465名が参加し、活発な情報交換が行われました。野鳥観察の記録をまとめたり、その記録が『季節前線ウォッチ』や様々な場面での分布情報として活用される『フィールドノート』の年間利用者数は645名でした。また、年始やゴールデンウィークなどには、フィールドノートを利用した『インターネット・バードソン』も企画していますので、ぜひご参加ください。そのほかに、『さえざり検索』や『TORIクイズ』など、鳴き声や画像による識別学習の支援やYouTubeなどを利用した発信なども行い、今後も野鳥に関する調査・研究の支援を行っていきます。

2023年度、バードリサーチの活動には、のべ4,327名の皆さんが参加してくださいました。そして、480名から3,940,574円の寄付をいただきました。寄付は、研究支援やツバメ・シロチドリの保全活動などに活用しています。また、継続的なご支援となる会費は732名からいただきました。会費は調査活動やデータ整備の大きな力になっています。協力会員から普通会员・賛助会員への変更や、新規入会は随時受け付けています。

全国の皆さまから寄せられた情報をまとめ、新年度も野鳥の生態や国内の自然環境に関する発信をしていきたいと考えています。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。



TORI Quizは
こちらからどうぞ ↓



表紙写真：ミソサザイ (Photo: 西 眞史)

特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒186-0002 東京都国立市東 1-4-28 篠崎ビル 302

E-mail : br@bird-research.jp

http://www.bird-research.jp

デザイン：いきものパレット



ミックス
責任ある木質資源を
使用した紙
FSC® C114747